

北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association

## ＜北海道熊研究会 会報＞ 第84号 2018年 8月 28日

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

既報会報の1～80号はWebsiteに「北海道野生動物研究所」と入力しご覧下さい  
ご意見ご連絡は本紙送信 email ではなく、下記の email へお願い致します

e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

### 「北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association の活動目的

熊の実像について調査研究し、熊による人畜及びその他経済的被害を予防しつつ、人と熊が棲み分けた状態で共存を図り、狩猟以外では熊を殺さない社会の形成を図るための提言と啓発活動を行う。この考えの根底は、この大地は総ての生き物の共有物であり、生物間での食物連鎖の宿命と疾病原因生物以外については、この地球上に生を受けたものは生有る限りお互いの存在を容認しようと言う生物倫理(生物の一員として人が為すべき正しき道)に基づく理念による。

### ＜速報＞門崎が顧問をしている日本熊森協会との共同見解

です(資料の収集で研究員の家田俊平・水見竜哉両氏に協力を得た)

**利尻島に北海道本島から泳ぎ来た熊は、既に再び北海道本島に泳ぎ戻り、北海道での本来の生息地に帰ったと、見られます。**

今年の ①5月30日に、利尻の鬼脇沼の海岸で足跡が見つかった熊は、その後、自動カメラで、姿が撮影され(日付 6/18、7/2、7/6、7/12 以上4回)、他にも各所で、足跡や糞が見つかったが、②7月12日に、糞と足跡が、旭浜(北海道本島と利尻島との、最短距離に当たる)で確認されたのを最後に、全く今日まで47日間、音信不通である。

って、この熊は、7月12日頃、以降目撃されていないから、夜間に、海を泳ぎ渡り、対岸の北海道の手塩の「オネトマイ地区」に行ったものと、私(門崎)は確信している。「オネトマイ地区」は、熊が時に出没している地域である。

<106年振りに泳ぎ来た熊について> 北海道熊研究会報 No. 81 からの抜粋 です

利尻島は北海道北西部の手塩町の海岸から海を約 19km 隔てた地所にある周囲 50km の島で中部に標高 1721m の利尻岳をようし、低地から高山に至る地理的環境が多様で、30 数年前の、私自身の調査知見だが、熊が餌とする陸棲草木・蟻類・海生動物(死体を含む)・海藻類などがあり、熊が 10 数頭は自活し得る陸島である。この島では 1912 年 5 月 24 日に、体長約 2.3m(門崎の知見)の雄熊が島に泳ぎ来たのを漁師がを見つけ、海岸に泳ぎ戻ったのを、斧で捕った記録が唯一である。明治以降は、開拓は熊を殺し、熊の土地を奪う事であったから、往時は年に 1 千頭から 2 千頭も殺した。故に江戸期には、多数の熊が居て、手塩一帯の陸地は未開地で、熊が自由に人を気にせずに往来し得た。熊は遊泳が巧みで、泳ぎを好む種で、30km ぐらいいは容易に泳ぐ。今回の熊が、利尻に泳ぎ渡った原因(動物の行動には、必ず原因と理由がある)、手塩の海岸に来て、海の先の山と森林を見て、そこが、如何なる所か、探索に来たと、私は見ている。この熊は①非常に慎重で、利口で、分別をわきまえ、しかも、好奇心旺盛な熊である。②北海道の自然を知り尽くしている。③人間の本性を知り尽くしている。④この熊は利尻島に居残るか、再び海を泳ぎ手塩の方に帰るか、の何れかであるが、「人が生物の一員として、他種生物に対し、人として為すべき、正しき道理、すなわち生物倫理の観点からも」静かに静観すべきである。この様な素晴らしい熊は、遺伝子としても、子孫に持続させる責務が、人類には、有るはずである。人はおごるべからずである。